

「ら抜き言葉」は外国人にどのように受け入れられているか

陣内, 正敬

Hermawati, Irma

<https://doi.org/10.15017/5339>

出版情報 : 言語文化論究. 5, pp.105-114, 1994-03-30. 九州大学言語文化部
バージョン :
権利関係 :

「ら抜き言葉」は外国人にどのように受け入れられているか

陣内 正敬 ・ Irma Hermawati

1. はじめに

現代日本語におけるゆれの中で常に話題に昇るものに可能動詞の問題がある。マスコミでは一般に「ら抜きことば」として登場し、第20期国語審議会の審議事項のひとつとして取り挙げられている大きなテーマでもある。

「見られる」(以下、「規範形」とも)と「見れる」(以下、「ら抜き形」とも)に代表される一段動詞、カ変動詞の可能形式のゆれについては、国立国語研究所(1981)において、その年齢差、性差、学歴差などの実態が明らかにされており、また渋谷(1993)では、これまでの調査、研究を踏まえた総合的かつ詳細な検討が加えられている。これら先行研究によれば、“ら抜き”の程度は、言語内的なものとしてその語形の長さや活用型などにより、また言語外的には前述の年齢差に加え地域差も見られる。さらに最近の調査では、真田他(1992)でも男女差(関西方言圏)についての言及がなされている。このようなさまざまな要因が絡んだ多様なゆれを見せるら抜き形ではあるが、今後増々勢力を増していくだろうというのが大方の見方である。それは次の3つの要因に集約され、このゆれが‘下からの変化’(井上1989)という根強いものであることを裏づけている。

- (1) 発音の容易さ
- (2) 意味の明瞭さ
- (3) 言語習得上の類推作用

さてこのような日本語可能動詞のゆれを前にして、日本で生活し、また、日本語を現に学んでいる外国人は、これをどのように認識し、どのように受け入れているであろうか。小論は外国人留学生を対象に行った可能動詞の使用と意識に関する小規模なアンケート調査の結果を報告し、いわば「外から見た「ら抜き言葉」像を探ることを第一の目的とする。また対照調査として彼らを取り巻く日本人に対して行なった同じ内容のアンケート調査と比較することで、両者の異同を明らかにすることが第二の目的である。」さらにこれらの考察を通してこれからの日本語可能動詞のあり方、外国人への日本語教育のあり方などを考える第一歩としたい。

2. 資料

2.1 調査の概要及び回答者の内訳

調査は1993年5月から7月にかけて九州大学(福岡市)に在籍する外国人留学生(一部他大学留学生)を対象に行われた。また同時に福岡市に居住する日本人に対しても調査対象留学生相当数を調査した。

留学生回答者の属性ごとに、性×年令(表1)、出身地域(表2)、本国における日本語学習歴×日本における日本語学習歴(表3)の順にその輪郭を示す。なお東南アジアは主にインドネシア、フィリピン、マレーシアの出身者、また南米の約半数は日系人である。

表1 外国人回答者数(性×年齢)

	男性	女性
10代	2	0
20代	29	40
30代	4	5
計	35	45

表2 外国人回答者の出身地域
()内%

韓国	7	(8.8)
中国・台湾	23	(28.8)
東南アジア	27	(33.8)
欧米	13	(16.3)
南米	8	(10.0)
その他	2	(2.5)
計	80	(100)

表3 外国人回答者の日本語学習歴(本国での学習歴×日本での学習歴)
()内%

本国 \ 日本	～1年	1～2	2～3	3～4	4～	計
～1年	20	13	5	1	1	40 (50.0)
1～2	7	2	0	0	1	10 (12.5)
2～3	8	1	1	0	0	10 (12.5)
3～4	8	1	2	0	0	11 (13.8)
4～	5	3	1	0	0	9 (11.3)
計	48 (60.0)	20 (25.0)	9 (11.3)	1 (1.3)	2 (2.5)	80 (100)

一方日本人回答者においては性と年齢のバランスのみ考慮し、他は福岡市在住という条件のみで出身地域などは問うていない。ただし九州大学在学学生や福岡市の住民の出身地域を考えるといずれも大部分は九州出身者と考えてよい。表4は日本人回答者の性×年齢である。

表4 日本人回答者数(性×年齢)

	男性	女性
10代	7	13
20代	6	18
30代	8	8
40代	4	10
計	25	49

2.2 調査項目

調査項目は大きく使用と意識に分かれる。前者においては語形の長さ（音節数）と、活用型を考慮し、表5のような語を選んだ。なお参考のため、共通語では可能動詞形が定着している五段動詞についても調べた。

表5 調査語一覧

活用型 \ 語幹音節数	1	2	3
上一段	<u>着る</u>	起きる	信じる
下一段	<u>出る</u>	<u>食べる</u>	忘れる
カ変	<u>来る</u>	/	
五段	書く、	^{はい} 入る、	帰る

これらの語について、友人に話すようなスピーチスタイルレベルでの例文を挙げ、「ら抜き形」、「規範形」のいずれを使用するか問うた。選択肢の中には“両方使う”も挙げた。表中下線を引いた語は、場面的相違が見られるかどうか次の2つの場面で問うている。「起きる」を例に調査語を挙げる。

(友達へ)

ゆうべ遅くまで起きてたから、今朝は早く_____なかった。

a. 起きれ b. 起きられ c. 両方使う

(先生へ)

昨夜遅くまで起きていましたので、今朝は早く_____ませんでした。

a. 起きれ b. 起きられ c. 両方使う

次に意識に関して、表中下線~~~~を施した4語について以下の3種類の質問をした。「着る」を例に取ると、

① 「着れる」と「着られる」では、どちらが正しいと思いますか。

② 「着れる」と「着られる」では、どちらが使い易いですか。

③ 「着れる」と「着られる」では、どちらを正しい日本語として認めてほしいですか。

①は規範形の知識、②は使い易さという実感

③は希望を問うたものといえる。

3. 集計結果と考察

前節で述べた調査項目の順に主に外国人留學生についての集計結果を示し、適宜日本人のデータと比較対照してゆく。

3.1 語形の長さ、活用型による

表6は調査語一覧(表5)に合わせて挙げた単純集計値(%)である。

表6によれば、「ら抜き形」の優勢さは次のような順となる。

来る > 着る > 起きる > 出る > 食べる
> 信じる > 忘れる

つまり活用の型では、カ変 > 上一段 > 下一段、語形の長さでは、1音節 > 2音節 > 3音節のように、この両者について階層が見られる。この結果はこれまでの日本人のデータときわめてよく符号するものである。教室の中ではこのようなことは教えられていないであろうから、この結果は彼らを取り巻く日常の日本語を敏感に感じ取り、賢く受け入れていることを物語るものであろう。ただし、五段動詞の結果からすると、「^{はい}入る」、「帰る」などに若干のゆれが見られ、活用型によって完全に区別されているわけではなさそうである。²⁾

今回調査の日本人のデータと比較したものが図1である。なおグラフの数値は、「ら抜き形」の使用率であり、“両方使う”を、ら抜き形、規範形双方に振り分けた後のパーセンテージである。

表 6 語形の長さ、活用型による ら抜き形/規範形の使用率 (%)
外国人留学生80名 (福岡市在住)

活用型 \ 語幹音節数	1	2	3
上一段	着れる/着られる 40.0/37.5	起きれる/起きられる 38.8/46.3	信じれる/信じられる 13.8/82.5
下一段	出れる/出られる 28.8/47.5	食べれる/食べられる 18.8/56.3	忘れれる/忘れられる 1.3/96.3
カ変	来れる/来られる 42.5/31.3		
五段	書ける/書かれる 95.0/2.5	はい 入れる/はい 入られる 83.8/12.5	帰れる/帰られる 75.0/16.3

3.2 上位場面と下位場面

表 5 中~~~~を引いた語について、先生に対して言う場面 (以下, 上位場面) と友人に対しての場面 (以下, 下位場面) とを比較したものが表 7 である。参考までに五段動詞「帰る」も挙げる。

表 7 場面によるら抜き形/規範形の使い分け
外国人留学生80名 (福岡市在住)

語 \ 場面	上位場面	下位場面
着れる/着られる	7.5/85.0	40.0/37.5
起きれる/起きられる	18.8/75.0	38.8/46.3
出れる/出られる	15.0/76.3	28.8/47.5
来れる/来られる	20.0/68.8	42.5/31.3
帰れる/帰られる	37.5/55.0	75.0/16.3

数値は%、各セル残りのパーセントは併用者の割合

場面による使い分けが明瞭であり、ら抜き形と規範形の文体差を意識していることがわかる。そしてこの使い分けは五段動詞にも及んでいる。この結果は表 8 の日本人データとも相以したものであるが、ら抜き形の割合については日本人の方がほぼ一貫して高く、下位場面だけでなく、上位場面でも差のあることがわかる。なお「出る」の逆転現象 (外国人のら抜き形の数値の方が高い) には有意差はないと思われる。

図 1 「ら抜き形」の使用率

外国人留学生80名, 日本人74名
(いずれも福岡在住)

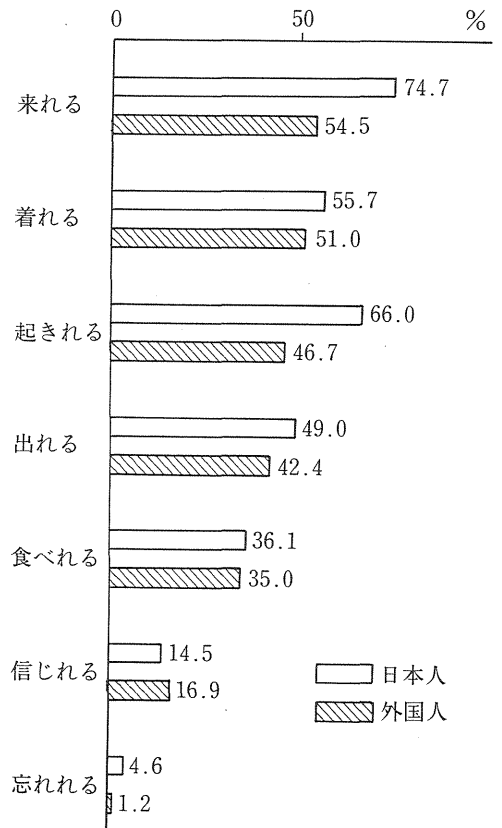


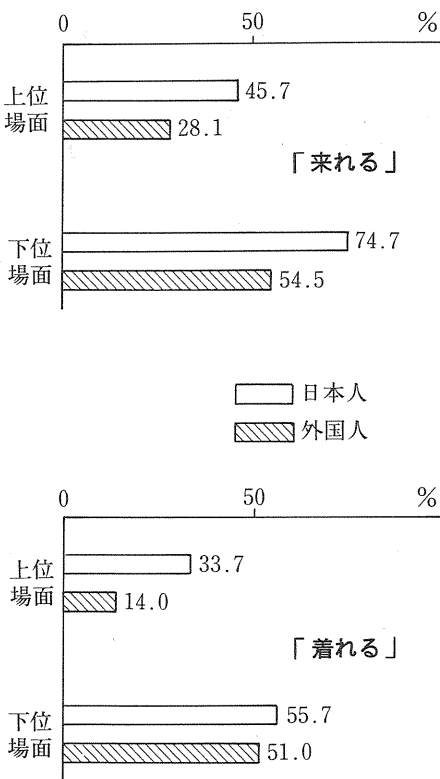
表8 場面によるら抜き形/規範形の使い分け
日本人74名(福岡市在住)

語 \ 場面	上位場面	下位場面
着れる/着られる	14.9/56.8	36.5/20.3
起きれる/起きられる	25.7/58.1	55.4/13.5
出れる/出られる	9.5/81.1	32.4/35.1
来れる/来られる	40.5/50.0	70.3/12.2
帰れる/帰られる	47.3/44.6	73.0/ 6.8

数値は%、各セル残りのパーセントは併用者の割合

図2は外国人下位場面の上位2語「来る」、「着る」に関し、外国人と日本人のら抜き形の使用率を比較したものである。図1と同様、「両方使う」をら抜き形、規範形双方に振り分けた後のパーセンテージである。

図2 「ら抜き形」の外国人、日本人比較



3.3 「ら抜き形」に対する意識

2.2調査項目で述べた①正しさ、②使い易さ③希望の3種類につき、その意識を調べた。表9、表10はそれぞれ外国人、日本人についての集計結果である。なお選択肢として「ら抜き形」、「規範形」の他に“両方”と“わからない”を設けた。各セル100%に満たない残りの数値が、後2者の回答である。

表9 ら抜き形/規範形に対する意識
外国人留学生80名(福岡市在住)

語 \ 意識	①正しい	②使い易い	③認めてほしい
着れる/着られる	12.9/ 78.6	52.9/ 31.4	15.7/ 42.9
食べれる/食べられる	8.6/ 82.9	52.9/ 32.9	20.0/ 44.3
来れる/来られる	18.6/ 68.6	48.6/ 30.0	24.3/ 35.7
入れる/入れられる	62.9/ 30.0	71.4/ 14.3	47.1/ 17.1

数値は%、各セル100%に満たないのは「両方共」ないし「わからない」の回答があるため。

表10 ら抜き形/規範形に対する意識
日本人74名(福岡市在住)

語 \ 意識	①正しい	②使い易い	③認めてほしい
着れる/着られる	39.2/ 40.5	67.6/ 21.6	37.8/ 17.6
食べれる/食べられる	21.6/ 63.5	62.2/ 28.4	35.1/ 24.3
来れる/来られる	37.8/ 40.5	73.0/ 13.5	41.9/ 13.5
入れる/入れられる	55.4/ 23.0	83.8/ 6.8	50.0/ 10.8

数値は%、各セル100%に満たないのは「両方共」ないし「わからない」の回答があるため。

①どちらが正しいかという質問については外国人の場合、「来る」(さらに五段動詞「入る」)に多少の混乱はあるものの、規範形の選ばれる割合は高く、大よそ正しい知

識を有していると見て取れる。それに比べ、表10日本人の場合は規範という面で相当にゆれている。「着る」、「来る」の2語については、ら抜き形と規範形がほぼ拮抗した状況であり、その混乱ぶりが窺える。

②どちらが使い易いかという点では、いずれも「ら抜き形」が上回っており、これが③どちらを正しい形として認めてほしいかという希望に対する反応にひとつの影響を与えているようである。つまり①知識と③希望の間に見られる規範形の大幅な減少は(例えば表9, 着られる: 78.6→42.9, 食べられる: 82.9→44.3, 来られる: 68.6→35.7), 一方でら抜き形を認めてほしいとする積極的「ら抜き派」の増加や、どちらでもいい、わからない派の中にあるであろう消極的「ら抜き派」の増加につながっていると思われる。

質問③にはその理由を知るために自由記入欄を設けておいたが、そこでの意見を要約すると次のようになる。

〈ら抜き派〉

- ・ 言い易い, 使い易いから
- ・ 意味の区別(‘可能’のみを表わす)が明瞭でわかり易いから

〈規範派〉

- ・ 文法的に正しいから(教室で習ったことだから)
- ・ もう慣れたから(言い易い, 使い易い)

なお、①正しき、②使い易さという意識は表7, 表8で見られた上位場面、下位場面における使用率にそれぞれ反映されていると見ることもできよう。

4. おわりに

外国人留学生が可能動詞形のゆれ—特に現代日本語の大きな問題となっている「ら抜き言葉」に関して、それをどう意識し、どう使いこなしているかを見て来たわけであ

るが、これまでの集計結果ならびに考察から次のようなことが明らかになった。

1. 一段動詞, カ変動詞の「ら抜き形」の割合を規定していると言われている要因のうち、少なくとも以下の3点で日本人の場合と同じであることが明らかになった。

- a. 語形の長さ(音節数)
- b. 活用の型
- c. 場面

ただし「ら抜き形」の使用率はほぼ一貫して日本人の方が高く、日本人の方がこの現象に関し一歩先に進んでいる。逆に言えば外国人のデータは年輩層の日本人の実態と近くなることが予想されるし、またこれは外国人が外国語の「文法」として習得したことを物語るものであろう。

2. 「ら抜き形」の意識については、それは誤りであるとの(現時点では)正しい認識を大方持っているが、「ら抜き形」の発音の容易さや意味の明瞭さから、「ら抜き形」を正式な日本語に認めて欲しいとの意見が増加する。一方日本人の場合は語形の正しき、発音の容易さ、容認の希望いずれにおいても外国人の場合よりはるかに「ら抜き形」の割合が高くなり、容認の希望については調査した3語(着る, 食べる, 来る)いずれにおいても、「ら抜き形」が上回りその要望が強いことがわかった。³⁾また1で述べた、「ら抜き形」使用率についての外国人と日本人の差は、日本人の方に「ら抜き形」を正しいとする割合が外国人のそれより高くなっていることから考えて、必ずしも日本人が規範に忠実でないから、「ら抜き形」の使用率が高いとは言えないことがわかる。

この他、3節では触れなかったが属性差の一面としての性差も見られるようである。日本人の場合については従来から、またごく最近では、安平美奈子(1993)でも指摘されて来たことであるが、女性の方が規範に忠実であるという報告が多い。図3には「来

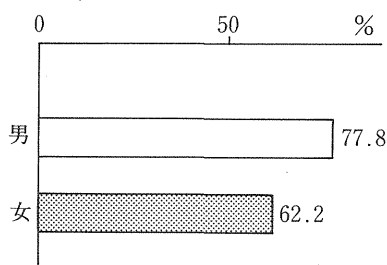
る」を例に、下位場面での「来れる」の使用と、“正しさ”に対する意識についての性差を示した。(女性45名, 男性35名)これについてはサンプル数もまだ少なく、明確には言えないが、図に見られる性差の現れは、この面でも日本人の使用実感に敏感に反応しているかも知れないし、あるいはそれとは全く無関係に、日本女性に限らず女性一般にあるといわれる規範意識の高さから来ることも知れない。

回答者のこの他の属性(学習歴, 出身地域, 日本滞在年数など)によるクロス集計はサンプル数の問題で今回は控えた。今後回答者を増やしてその面での細かな実態を探ってゆきたいと思う。

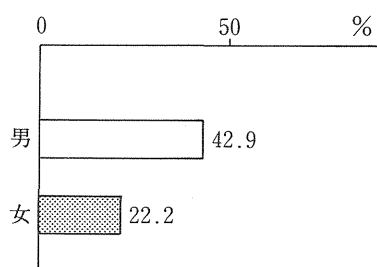
「ら抜き言葉」については、実にいろいろの意見, 立場があり、識者からは一般に否定的な声が聞こえて来ることが多い。しかしながら外国人にとっての日本語(最近では日本人若年層にもいくらか当てはまるようだが)という見方に立てば、わかり易さ, 発音し易さ, 聞き取り易さという点では「ら抜き形」の方が勝っているように思われる。日本語の歴史は決してないがしろにはいけないが, ‘日本語の国際化’という観点からは、むしろ奨励しても良い現象なのではあるまいか。

図3 「ら抜き形」使用と意識の男女差
外国人留学生男性35名, 女性45名
(福岡市在住)

・「来れる」(下位場面)の使用率



・「来れる」を“正しい”と答えた割合



*小論執筆のもととなったのは, Irma Her-mawati (平成4年度日本語日本文化研修留学生・シンドネシア出身)が陣内に提出した修了レポートである。Irma Herma-watiが企画, 収集した調査票をANA-LYSTに入力し, 陣内が改めて集計・分析ならびに考察を加えたものである。

注

- 1) 日本人に対する「ら抜き言葉」調査は、これまで様々な種類のものがあり、その資料も利用できるが、同一の調査票を用いて外国人, 日本人を比較するということと、外国人回答者と同一地域に居住する日本人を対象とするという2つの意味で今回調査の日本人データを利用する。ただ回答数は74名とまだ不十分である。
- 2) 「入る」, 「帰る」の値が低いのは、-iru, -eruで終わる一段動詞から類推される規制が働いたためと思われる。そのような類推の働かない「書く」はゆれがほとんどない。なお、同様のこ

とが日本人回答者の方にも見られた。

- 3) 「ら抜き言葉」の規範意識について、1993年11月、231名の大学生を対象としたアンケート調査を行なった。回答者は主として九州、西中国出身者で、一部関西、中部、四国などの出身者も含まれる。なお調査地は北九州市。

質問は次の2つ。

- (1) 「見られる」に“可能”の意味は含まれるか。
 (2) 「見れる」を書きことばにして良いか。

その集計結果を(1)×(2)のクロス表で示す(表11)。“分化グループ”とは、「見れる」が“可能”、「見られる」が“受身、尊敬”など“可能”を含まないというように両形に意味の分化が生じているグループ、“未分化グループ”とは、「見られる」に“可能”が含まれるグループのことである。また「ら抜き言葉」の書きことば化については、それを次の4つのグループに分けた。

「肯定」：無条件に肯定

「条件つき肯定」：書きことばの中での改まりの程度や、語などにより、条件つきでの肯定

「反対」：無条件に反対

「不明」：どちらとも態度を決めかねる

表11で「条件つき肯定」も併わせると、肯定派はほぼ6割に上り、若年層の言語意識の中で「見れる」はかなりの規範意識を獲得した感がある。これには彼らの言語環境もさることながら、「見られる」に“可能”を感じないとする者の割合が全体の3分の1になっているという事実が大きく絡んでいるに違いない。

表11 「見れる」の書きことば化について ()内%, 北九州市在住大学生231名

	分化グループ	未分化グループ	計
肯定	37	55	92(39.8)
条件つき肯定	17	27	44(19.0)
反対	14	46	60(26.0)
不明	11	24	35(15.2)
計	79(34.2)	152(65.8)	231(100.0)

参考文献

- 井上史雄 1989 『言葉づかい新風景 (敬語と方言)』 秋山書店
 国立国語研究所 1981『大都市の言語生活—分析編—』国立国語研究所報告70-1, 三省堂
 渋谷勝己 1993 『日本語可能表現の諸相と発展』大阪大学
 真田信治他 1992 『社会言語学』桜楓社
 安平美奈子 1993 「団塊の世代を知らないジュニアたち～“若者ことば” アンケート報告・第2回～」『放送研究と調査』11 日本放送出版協会

How 'ra-deleted forms' are accepted by foreigners in their uses and attitudes

Masataka Jinnouchi Irma Hermawati

It is a remarkable phenomenon of spoken Japanese in progress that the form expressing 'potentiality' fluctuate between *-rareru* and *-reru* (eg. *mirareru/mireru* 'to be able to see', the latter form is recent, and it is often referred to as the 'ra-deleted form').

A questionnaire survey was carried out to investigate how these 'ra-deleted forms' are used and are regarded by some foreigners living in Fukuoka city. 80 foreign students of both sexes and of various countries served as informants.

The processing of data shows the following results.

(1) In the use of the 'ra-deleted forms,' the order of words in their percentages is almost the same as that of Japanese natives, in terms both of the length of the word and of the conjugation type.

Furthermore, it is revealed that 'ra-deleted forms' are much more favored in informal situations than in formal ones.

(2) In their attitude toward the 'ra-deleted forms,' although they know well that the forms are not correct in standard Japanese, their hope is that the forms are acceptable because of the easiness in pronunciation and, in some cases, greater clarity in meaning.